

十勝の歴史を語る 手づくりの野外劇

北海道・帯広市
とかち市民創作野外劇実行委員会





明日から夏休みを控えた終業式の日、一人の少女が、夢の中でコロポックルに導かれ、十勝の歴史をたどる。

コロポックルが十勝の森を駆け巡っていた時代。アイヌの人たちが自然とともに暮らしていた時代。江戸末期、松浦武四郎による東蝦夷地の探検、明治十六年からはじまる依田勉三たちが興した晩成社による開拓事業の希望と挫折、全国各地からぞくぞくと開拓団が十勝各地に入植した明治末期、第一次世界大戦で豆成金やでんぶん成金が空前の好景気を謳歌した大正時代。そして戦争の時代、軍馬に徴用される愛馬と別れを惜しむ少年、空襲で機銃掃射を受け、苦しみながら亡くなる少女。戦後、復興のとき。空港ができ、鉄道が開通する。発展をつづける十勝。

十勝の歴史を五幕九場、歌、踊り、芝居、朗読で表現した野外劇「十勝野はるか」が七月六、七日の両日、帯広市の緑ヶ丘公園の多目的広場で上演された。

公演は今年で三回目。キャストは、コロポックル役の子どもたちをはじめ、アイヌの舞踊や歌謡を伝承している帯広カムイトウボボ保存会の面々、サラリーマン、主婦、カメラマン、自衛官、NPO団体代表、帯広市長も参加し約百八十人、それに馬のシルキー号。これにスタッフが加わり、総勢四百五十



人を超える市民がかかわった。この人たちが、実行委員会の立ち上げから一年近くにもわたる準備をかけて上演された。

「この十勝の地で市民参加による手づくりの野外劇を上演したい」という想いは七、八年前にさかのぼる。新聞社やイベント会社に務める三人が十勝のまちづくり、まちおこしをはかるため、野外劇ができないかと考えた。仕掛人の一人で、現在は実行委員会の事務局長を務める鈴木繁男さんはこんなふうに言う。

「十勝には歴史がない」と、私たちはよく言う。しかし開拓がはじまってからでも百二十年。数代にもわたる積み重ねがある。この重みを私たちが表現することにより十勝の歴史、文化に誇りを持ってたらしめたい。

市民野外劇の老舗である富山県高岡市の野外音楽劇や北海道函館市の五稜郭で行われる市民創作劇「函館野外劇」なども観に行つたという。規模の大きさに圧倒されたという。

そこで、心がけたのは「手づくりの野外劇」「身の丈にあったもの」をめざした。今回、劇中で使われる段ボールで作ったジャガイモやニンジンなどの四十もの野菜の帽子や、トラクター、飛行機、書わりなどの大道具は、いずれもスタッフ、キャストが夜中までかけて作つたものだ。もちろん舞台や観客席の設営も専門的などころを除き、自分たちでやつ



た。

もう一つは、地元に住む専門家の参加。この地の魅力に惹かれ、近くの新得町には脚本家の高木福光氏が西洋民宿を営んでいた。清水町には、作曲家のクニ河内氏が農業を営んでいた。絵本作家の本田哲也氏も同じく清水町に在住していた。それぞれに演出、音楽、美術面での参加を求めたところ、快く引き受けてくれた。

三回目を終え、すでに、来年に向けてキャストやスタッフの募集が始まっている。鈴木さんは、「三回目まではきつかけづくり。これからは、この野外劇を通じて何ができるかを考えていきたい」と語る。年に一回の公演だけではなく、例えば、学校などで公演することも、と付け加えた。また、高木さんは自らのホームページのなかで、この野外劇を母体にして開拓写真展、歴史講演会、街づくりのプロジェクトなどのネットワークづくりを提案している。

この市民野外劇で培われた市民の連帯が帯広や十勝のまちづくりに、今後大きな力を発揮していくことを期待したい。

■連絡先 とかち市民創作野外劇実行委員会事務局
〒〇八〇一〇〇二一北海道帯広市西十一条南三四丁目一五番地(株)トム・エンタープライズ内

TEL 〇一五五一四八八三三八〇

<http://homepage2.nifty.com/tokachino/>

E-mail tokachino@jp.bigplanet.com